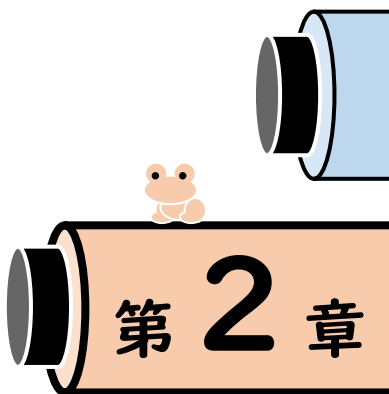
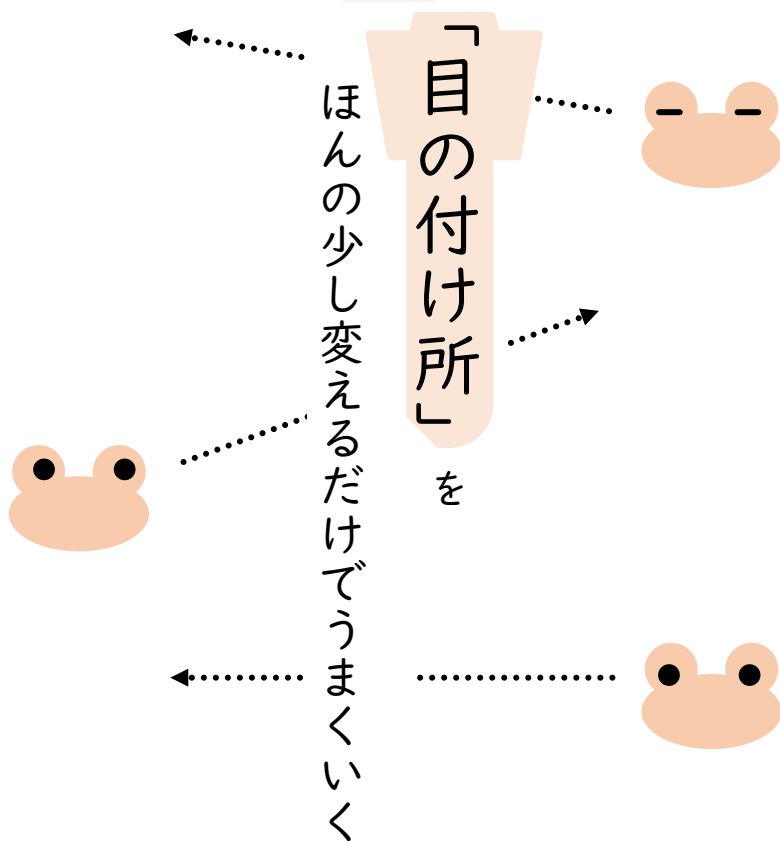




対人・生活場面の困りごと



ピンチはチャンス





先生の困りごと

Bから「私のいないところでAが私の陰口を言っていて、それに周りの友達もつられて一緒に私の陰口を言っているようだ」と訴えがありました。Bには、「そんなの気にせず放っときや」と慰めたのですが……。



- ① みんなの前でAを叱る。
- ② Bの味方になり、Aを悪者扱いする。



なんでこうなるの？

様々な要因から考える 嫉妬心からくることも……

行動の背景に何があるのか、子どもの困り感は何なのかを見極めることが必要です。例えば、陰口を言う子どもの場合は、陰口を言う相手が自分より好かれていたり、成績などが優れていたりすると、嫉妬が原因で陰口を言っていることも少なくありません。陰口を言うことで自分が上にいる気分を感じているのかもしれませんが。

またBに対してのフォローも大切です。陰口を言われ傷ついている子どもに対しては温かい言葉かけを意識するとともに、どうすれば安心できるかを聴いたうえで対応します。具体的には①担任に話を聞いてもらうだけで安心できる、②Aと話をする場をもってほしい、③Aに謝ってほしいと思っているなどのレベルでの対応が考えられます。

あったか秘策

Change!

21

言動の裏にあるSOSに気付く

一 気持ちに寄り添いながら伝える

「陰口を言う」行動に対しては、「人を傷つける」行動であり、「だめなことはだめ」と伝えます。しかし、否定から入ると素直に聞くことができないので、先にAの言い分を聞いて気持ちを受け止めつつ、Aが認識できていない事実を確認しましょう。その上で、Bの気持ちを伝えるようにします。そして、ただ悪いと叱るのではなく、なぜ悪いのかについて具体的な例を挙げながら説明しましょう。

二 応援する関わり

問題行動の根っこにあるのは不安やストレスです。親からの愛情不足だったり、悩み事があって不安定になっていたり、Aが何に対して不安やストレスを抱えているのかを、Aとの関わりを通して、知ることが大切です。「向き合うときには肯定的に、味方と感ずることのできるような応援する関わり」としての愛着保障をしましょう。個別にAに対する期待や頑張りに対する評価をささやくことも効果的です。

三 道徳の授業で自我関与

道徳の授業等で、Aの事例に似ている教材を使って学習しましょう。その際、陰口を言われたときの気持ちを考えるロールプレイ **p.138** などを取り入れると効果的です。この学習を通して、陰口を言われた人の立場にたって、学級のルールを考えたり、お互いを尊重しあったり、みんなが安心して過ごすことができる学級にするためには何が必要かを考えます。

Aは気持ちが伝わりにくいタイプかな？と感じたら、「気持ち」に訴えるのみではなく、学級のルールとしての「理解」を促しましょう。悪い行動で表出している「意図」に注目して、社会のルールとして認められる行動に置き換えるなど、本人と集団のよい関わりを増やす、具体的な指導をしてみましょう。



先生の困りごと

4人グループの中で、AがBに対して、「Bは、最近生意気やからみんなで無視しよう」と言い出し、他の二人は乗り気ではなかったのですが断り切れず、Bを無視し始めました。明るかったBは、今は暗い表情が多く学校も休みがちになってきています。



- ① Bからは相談がないのでそっと見守る。
- ② みんなの前で「いじめではないか」と聞く。



なんでこうなるの？

不安・不安定な心

いわゆる「仲間外れ」は、自分の保身や優位性、特定の人への妬みや嫉妬、異質なものへの排除などから起こります。

自分が注目を浴びたかったのに、思いどおりにいかない現実が面白くないと感じたり、これまで培ってきた関係やルールが崩れることへの大きな恐怖心を抱いたりするなどの不安から、相手を無視する言動にいたってしまうケースが少なくありません。

またBに対してのフォローも大切です。無視されて傷ついている子どもに対しては温かい言葉かけを意識するとともに、どうすれば安心できるかを聞いたうえで対応します。具体的には①担任に話を聞いてもらうだけで安心できる、②Aと話をする場をもってほしい、③Aに謝ってほしいと思っているなどの対応が考えられます。

一 気持ちを受け止め、安心を感じさせる

人間関係のトラブルにおいてどちらか一方だけが悪いという状況は少ないと思います。Aに話を聞く際には、事実の確認をしながら客観的に捉えることができるよう、ホワイトボードや黒板に絵などを用いて関係を分かりやすく示します。Aが落ち着いて話ができる状況をつくり、無視するという言動になった背景を聞き、「あなたはそう思ったんだね」とAの気持ちを受け止めましょう。そして「Bはこう思ったんだ」とAが感じ取れていない感情や状況・情報を伝えましょう。学級では誰も孤立していないという安心感をもたせるために具体的に伝えてみましょう。

二 活躍できる場をつくる

問題行動の根っこにあるのは不安やストレスです。Aが何に対して不安やストレスを抱えているのか、Aとの関わりを増やし知ることが大切です。また、Aの不安やストレス対応として、Aを含めた困っている子どもが活躍できる場をつくります。その後具体的に何ができたのかを確認しつつ、成功体験を保障します。頑張ったことを保護者にも伝え、学校・家庭の両方から本人を温かく見守れるように働きかけてみましょう。

三 ストレスマネジメントを取り入れる

ゆっくりと呼吸しながら体の中のイライラなどの気持ちを吐き出していく「イメージ呼吸法」や、手や足などに力を入れる動作と力を抜く動作を繰り返し行うことで、リラックスした状態を実感する「漸進性弛緩法」などのストレスマネジメント [p.134](#) を、朝の会や5時間目の始まる前などで取り入れ、学級で実践してみるのがおすすめです。ストレスを溜めない身体づくりを自主的にできるようになることも必要です。

先生の困りごと



Aは、仲のよい子どもには優しいですが、気に入らないBに対しては、「あいつ、むかつく!」と言ってきつい言葉を投げかけます。Bも「やめて」とは言えず、最近では暗い表情をしていることが多く気になっています。



- ① 見かけたら「そんなこと言ったらいかん」と注意している。
- ② Bからは相談がないのでただ放っている。



なんでこうなるの？

様々な要因からくる満たされない心

行動の背景に何があるのか、子どもの困り感は何なのかを見極めることが必要です。例えば、不安から情緒不安定になっており、感情のコントロールができないために、他者に対して暴言などの行動が見られる場合も少なくありません。大勢の前では威張って暴言を吐いていても、一人になると罪悪感や不安で押し潰されそうになっていることもあります。悪いと分かっているが寂しさや嫉妬心を埋めるためにきつい言葉を行っているのかもしれません。

一 Aの困り感に寄り添う

Aが発する「あいつ、むかつく」という言葉から、その裏に何が
あるのか考えましょう。イライラが出ていたり、プレッシャーを感じ
たりすることがあるかもしれません。そんなときは、「落ち着こうか」と
言葉をかけ、Bから離します。落ち着くことができる場所でAの話
を聞き、Aの困り感に寄り添い、ニーズに注目しましょう。

自分の困り感を教師に分かってもらい認められることで、イライ
ラが少なくなり、Bに対して暴言を吐くなどの行為もなくなるかも
しれません。また、「怒りの感情の伝え方」をみんなで練習すること
もAの気持ちに寄り添う一つの方法です。

二 不適切な言動は見過ごさず、適切な言動を教える

人権を無視する言動には、注意喚起をして助け合う関係に切り替
えましょう。不適切な言動には、「その言葉はダメ」と事実のみ伝
えます。それは見過ごしていないことを本人と周りに伝えることにな
り、教師は攻撃されている人を守ってくれる人ということが分か
ります。その際、「○○って言ったら分かるよ」など端的かつ具体
的に、肯定形で、あるべき姿をその場で示して注意喚起するとよい
でしょう。また、極端に不適切な言動には、全教職員で共有して組
織で対応する場合があります。社会で認められない言動は「ダメな
ものはダメ」と教え続けることが重要です。

三 言葉を大切にした学級づくり

人権を無視する言動について学級で考えることも大切です。子ど
もたちで何かルールを決めるのもいいですね。「言葉を大切にした
学級づくり」をみんなで共有しましょう。そして暴言を吐かれた子
どもに寄り添うことができる子どもを増やしましょう。「今日嫌な
ことがあったときに誰がそばにいてくれた？」と聞きながら、子ど
も間の優しい関わりを周りに広めることも一つの方法です。



先生の困りごと

Aの不適切な言動に対して私が注意をすると、「うるさい」「黙れ」「うざい」など、反抗的な言葉が返ってきます。さらに怒ると、Aの感情が高まりエスカレートしていきます。



- ① 「誰に向かって言いゆうが!」「そんな言葉はいかん!」と感情的に怒ってしまう。
- ② どうしていいか分からなくなり、諦めている。



なんでこうなるの?

自分を見てくれないイラ立ち

私たち教師は子どもの不適切な言動に遭遇すると、その言動だけを捉えて注意してしまいがちです。子どもは不適切な言動だけを注意されると、「先生は何も分かっていない」「いつも自分ばかり」と感じ、つい反抗的な態度をとってしまうことがあります。さらにその反抗的な言動に対して、教師が同じ土俵に立って感情的に怒ってしまうと、自分を見てくれないイラ立ちから、ますます攻撃性が増し、関係性までも悪くなってしまいます。

あったか秘策

Change!

24

言葉の裏にある本当のメッセージを聴く

一 感情を挟まず淡々と対応

感情が高ぶっている子どもには、感情を挟まず淡々と対応しましょう。声を荒げず、壊れたレコードのように、短い言葉を2, 3回繰り返し伝えます（ブローンレコード対応 [p.137](#)）。声を荒げると逆効果になる場合が多いです。落ち着いたなら「あ、落ち着いたよね。よかったね」と評価を返します。「いいね」のフィードバックをどんどんしていきましょう。「いいね」を返すことで望ましい行動の強化ができます。感情を挟むと、負の言葉ばかりになってしまいます。

二 不適切な言動の本心に注目して関わる

子どもが落ち着いたなら、なぜ、不適切な言動に至ったのかなど背景や気持ちを聞きましょう。時間や場所があれば、別室で話を聞くのもいいでしょう。「どうしたの」「何があったの」「どうしてそうなったの」「何か困っていることがあるの」「君はどうしたいの」「何を支援してほしいの」など子どもの話をじっくり聞いて、その思い（認められたいのか、イライラすることがあったのか、やりたいけどできないのかなど）に寄り添いましょう。

三 プラスの支援で関わる

注意を促すようなマイナスの関わりではなく、「いつも〇〇頑張っているね」「△△してくれてありがとう。助かるよ」というような承認や期待を届ける、励ます、感謝を伝えるなどプラスの支援で関わりましょう。不適切な言動は一定スルーしつつ、よい行動に注目して強化する（認める）ことによって、よい行動が増えていきます。教師が応援する関わりをもつこと、見捨てないこと、諦めないことが大切です。



先生の困りごと

Aは、普段から言葉遣いが悪く、友達に対して大声で「おい、こら」「やれや」と命令して周囲からも恐れられています。



- ① 頭ごなしにAの言動を注意する。
- ② 何度注意しても変わらないので、Aの言動をスルーする



なんでこうなるの？

言葉の遣い方の未学習・誤学習
性格ではなくスキルの問題

その言動の背景には、家庭環境であったり、言葉の遣い方が未学習であったりするスキルの問題など様々な要因が考えられます。言葉遣いが不適切なことで、いつも大人から怒られたり、周りから誤解されたりする状況が続くと自己有用感がもてなくなり、さらに他者に対して暴言が増える場合も少なくありません。

一 気持ちは受け止め、適切な言動を教える

不適切な言動を見かけたら、否定から入ると素直に聞くことができないので、「どうした？」と言葉をかけて、先に言い分を聞きます。そして、Aの気持ちを受け止めつつ、事実として「ダメなことはダメ」とはっきり言い、「適切な言動」についてその場で端的に伝えます。

落ち着いたときに、「こう思ったんじゃないの」「こうしなかったんじゃないの」と内面や心情の言語化を行います。また「おい」ではなく「ちょっと待って」、「やれや」ではなく「手伝って」などの代替行動と「大声」ではなく「今の半分の声」で伝えるなどの制限で、よりよい言動を具体的に教えます。

二 言語環境を変える ～言葉でお互いを大切に～

学級の中でも、言葉で伝えることの練習をします。視覚的に捉えることができるように『ごめんね』『ありがとう』が言えるようになろう』のカードを掲示するのも一案です。教師がモデルになり丁寧な言葉を使います。言葉を丁寧に扱うということは、その人を一人の人間として大切に扱うということと同じです。

三 認める言葉かけでよい関係づくり

問題行動の種類は様々であっても、その根っこにあるのは不安やストレスです。そこをどのように満たしていくのが大切です。「先生に褒められる」「認められる」という小さなことの積み重ねは、意外に効き目があるのです。「姿勢がいいね」「〇〇を頑張っているね」など当たり前前に頑張っていることに対しての言葉かけから始めてみましょう。ポジティブな関わりを増やすことで、心が満たされていきます。学級で本人のよさをそれとなく伝えることで、子どもたちの目が欠点だけに向かないようにし、教師だけでなく、周りの子どもたちから認められる場面も増やすことが大切です。



先生の困りごと

頑張っている友達の作業や発言を、ばかにしたり、からかったりしてくるので、周りの子どもが、目を伏せたり、黙り込んだりと、教室が嫌な空気になります。



- ① その場を見ても、何も注意をしない。
- ② 「いい加減にしろ」と感情的になる。



なんでこうなるの？

引き下げの心理が働いている

無意識に、自分より優秀な人がいると、自分のプライドを守って劣等感を消すために、人のやることにケチをつけて引きずり下ろしたり、批判したりするという引き下げの心理([p.136](#))が働くことがあります。自分の存在が大事なものと思えていなかったり、誰かにばかにされたりした経験があったり、何か自分一人では抱えきれないストレスを感じていて、適切に処理ができていなかったりするのもかもしれません。

また、互いに高め合えるよい集団になりたいと思えていないということも考えられます。

あったか秘策

Change!


26

確認する 「自分の行動に責任をもつ」ということを


一 自分の行動に責任をもつということの確認を

自分で責任が取れることであればどんなに失敗をしても構いません。失敗して物を壊したら元に戻したり、次に同じことにならないようにどう行動したらいいかを考えたりしていけばよいですし、失敗は成功の元です。ただし、傷つけられた心は謝られても元に戻すことはできません。元に戻せないということは責任を取ることができないということを伝えます。自分の行動に責任をもつということに対する確認を学級全体でおきましょう。いじめにつながる行動に対しては毅然とした態度をとり、子どもとの信頼関係を築きましょう。

二 パーソンポジティビティを広げる

パーソンポジティビティ  p. 136 のことを学級で共有してみましょう。パーソンポジティビティとは、よい集団にみられる人のよいところを見付ける傾向です。人のよいところを見付けることが得意な人は、自分自身が成長します。なぜなら、人のよいところはよきモデルとなり、自ら学ぶことができるからです。そして、その人の周りは、自然とパーソンポジティビティが広がり、いつの間にかその空気で満たされます。

三 自分を大事に思えるように

いつでもどんなときでも自分のことを気にかけてくれる人、見守ってくれる人の存在こそ、人が育つ上で大きな力となります。子どもが自分に誇りや自信をもち、自分を大切に思えるよう、いろんな場面でよさをフィードバックしたり、話をじっくり聞いたり、相談にのったりと関係を築いていきましょう。あったかプログラム  p. 130 のエクササイズ「いいとこみつけ」を定期的にしたたり、ノートや日記などで担任とその子どもの好きなことや頑張っていることについてやり取りを行ったりすることも効果的です。



先生の困りごと

Aは、日頃から落ち着かず、他者への暴力行為が絶えません。本人は周りが悪いという意識をもっていますが、Aの方からちょっかいを出してトラブルになっているのが現状です。注意してもなかなか聞かなくて困っています。



- ① 本人が興奮しているときに指導する。
- ② 担任だけで対応している。


 なんでこうなるの？

全ての行動には意味がある

行動の背景に何があるのか、子どもの困り感は何なのかを見極めることが必要です。例えば、幼少期の頃、特定の人と愛着関係の形成ができておらず、人として生きていくための根幹に関わることに影響が及んでいる場合や、自己肯定感がもてなくなり、感情のコントロールができないために、他者に対して暴力などの行動が見られる場合も少なくありません。

あったか秘策

Change!

27

こんなときこそ、冷静に（子どもも教師も）丁寧な対応で安心を感じさせる

一 ペーシングで呼吸を合わせる

トラブルを起こしたときは、まだ興奮状態であるのでクールダウンできる場所や部屋を確認して、本人が暴力の対象になっている子どもをその場から離しましょう。背中をトントンとゆっくり優しくたたいたり、なでたりすると興奮がおさまってくることもあります。気持ちが落ち着いたら、子ども本人の呼吸にペーシングしましょう。相手の肩や胸や腹部の動きを観察しながら、同じ呼吸になるよう合わせていきます。そうすることで、子どもとの間に一体感が生まれてきて、安心して話ができるようになります。

二 本人の感情は受け止め、事実確認は淡々と

気持ちが落ち着いたら、肯定的な向き合い方で話します。トラブルを起こした本人と話が合わないときは、本人が受け止めている感覚は子ども本人にとっては「真実」だと考えてあげて「君はそう思ったんだね」とまずは受け止めます。次に、他の人はこう思ったんだと本人には感じ取れていない他者の感情や状況を伝えます。このように本人と周囲が認識している事実を淡々と確認します。確認の際にはホワイトボードや紙などに書いた方が視覚的にも関係が分かりやすいかもしれません。

三 保護者の味方となり、同じ方向性で関わる

保護者は、学校からの連絡を「また悪いことをしたのでは」と警戒しがちです。保護者に連絡するときには、頑張っている様子から伝えましょう。悪い報告をしなければいけないときも、よかったときの情報も伝えておき、成長しているからこそ頑張ってもらいたいと期待も含めて伝えましょう。

保護者と信頼関係を築く中で、頑張っている保護者も認めつつ、保護者が「何に困っているか」について考えることも大切です。保護者と連携し、同じ方向性をもって関わることは、子どもにとっても安心できる環境の保障につながります。



先生の困りごと

毎日使う学習道具をよく忘れてくるし、水着や体操服など、時々必要な物も忘れてくることが多いです。忘れ物があると授業への参加が不十分になるので、ちゃんと持ってきてほしいのですが……。



- ① 「親がちゃんと見てくれないから、忘れ物が減らないのよね」と決めつける。
- ② 忘れ物をした人を一覧表にして黒板に貼る。



なんでこうなるの？

忘れ物をしやすいパターンは人それぞれ
どうやったら忘れ物なく準備ができるか、工夫が必要

学年が上がるにつれ、自分で明日の準備をするようになってくると、忘れ物をしやすくなる子どもが出てきます。大人でも、忘れ物は「つい」「うっかり」してしまうものです。

自分にとっての「こうやれば忘れ物をしなくなる」がまだ見付かっていないのでしょう。

あったか秘策

Change!

28

本人と一緒に「これならできそう」な方法を考える

一 必要なものの「見える化」

家で明日の準備をするときに、持ってくるものが分かるように、「〇〇セット」と名前を付けて連絡帳に書くようにします。イラストにした方が分かりやすいときもあります。

【小学校】

いつものセット 教科書・ノート
 筆箱（鉛筆・消しゴム・赤鉛筆・定規）
 時々セット 体操服（Ｔシャツ・ズボン・赤白帽子）
 水着セット

【中学校】

4点セット 教科書・ノート・ファイル・ワーク

二 特別なものは事前にお知らせ

季節ものの水着や、コンパスや三角定規、彫刻刀など、時期によって必要なものについては、購入が必要な場合もあるので、学年だよりや学級だよりで事前にお知らせしておきます。また、実際に使う1週間前くらいから、連絡帳にも書くようにします。

三 お互いのとっておきの技を伝えあう

忘れ物をしないために工夫していることを、帰りの会で話題にし、出た意見をカードにして教室に一週間掲示します。

【例】 付箋に書いてランドセルの内側に貼る

手に書いて帰る 連絡帳に蛍光ペンで印をつける

一週間後、「やってみてよかったもの」を出し合います。「〇〇さんは、△△さんのとっておきの技がよかったのね」「うまうまってよかったね」といった言葉かけは、学級の仲間の役に立ったこと、忘れ物をしなかったことに対して承認することになり、一石二鳥です。また①片付ける場所を決める、②「セット」にする、捨てるなどで片付ける量を決める、③片付ける時間を決める、が基本です。



先生の困りごと

Aの周りには物がいつも散らかっています。机の上はノートや教科書が出しっぱなし。筆箱が机から落ちて、中身がガラガラガッシャーん!!なんてこともしょっちゅう。それを拾っていると、今度はノートやプリントがバサバサと落ちる始末で……。注意してもキリがありません。



- ① 「早く片付けなさい」と注意する。
- ② 「またぐちゃぐちゃやね」「だらしがいいね」と本人が傷つく言葉や、他の子どもたちに悪い印象を与えるような言葉を使う。

なんでこうなるの？

片付け方が分かっていない
片付けやすい環境が整っていない

ずっと「どうしてこんなに散らかしてるの」「ちゃんと片付けなさい」と怒られてきたかもしれません。でも、本人は、散らかしたくて散らかしているわけではありません。きっとその子ども自身も、どうしてこんなに散らかってしまうかは分からないでしょう。困っているのは本人です。

片付けが苦手な人に「早く片付けなさい」と注意することは、走ることが苦手な人に「もっと速く走りなさい」と注意することと同じようなことです。そう捉えると、片付けが苦手な子どもへの適切な手立ては、「注意すること」ではないと気付けるのではないのでしょうか。

一 物の住所を一緒に決め、一緒に片付ける

本人にとって、整理しやすい方法を一緒に考えて一緒に片付けましょう。「物にも住所があるんだよ」と教えてあげましょう。道具かごやロッカーに入れるものを決めてイラストで示す、整理されている状態の写真を撮って貼る、などが効果的です。これらの方法は、その子どもだけでなく、他の子どもにとっても有効です。よい方法を学級全体で共有することによって、みんなで片付け名人を目指していくとよいでしょう。

また、学級には、たいてい一人か二人くらいは整理整頓が得意な子どもがいるものです。その子どもたちの力を借りながら、整理整頓の工夫を共有するなど、日頃から教室環境全体を整えていくことも有効です。

二 使ってよい空間を増やす

教室に、整頓に使える空間はありませんか。特に支援が必要と考える子どもの場合には教室の横の棚を使ってよいことにするなど、片付けや整頓のために使ってもよい空間を増やしてあげると、整理しやすさが格段に上がります。

三 ルーティン化

週1回曜日を決めて、机の中や、道具かごの中を全部出して整頓したり、不必要なものがあれば処分したりするなどの“整頓タイム”を設定してはいかがでしょうか。みんなで一斉に整理整頓する時間をルーティン化すると、自分から進んで整頓できる子どもが増え、よい習慣が定着していきます。家庭での習慣付けの機会が少ない子どもは、学校で、みんなと一緒に、習慣付けることで本人を育てていきましょう。



先生の困りごと

最近、掃除の時間に、だらだらしたり遊んだりしている子どもが増えてきたように思います。毎日注意をしていますが……。どうやったら真面目に掃除をしてくれるようになりますか？



- ① 「あの子はちゃんと掃除せんき、他のみんなでやろう」と、その子を見放す。
- ② 真面目に掃除していた子どもも含めて班全員や学級全員に掃除のやり直しを命じる。


 なんでこうなるの？

掃除することの意義や楽しみを感じていない

子どもたちは、掃除をすることの意義を感じていないのかもしれませんが。

「掃除をしなさい」と注意するよりも、掃除をしたくなるような仕掛けを考えてみませんか。掃除は、学年や学校全体で取り組むものなので、一人で悩まず、周りの先生方とよりよく掃除ができるようになる方法を考えていくことが、何よりの解決策といえそうです。

あったか秘策

Change!

30

掃除をしたくなる仕かけづくり

一 掃除の意義を考える

「なぜ掃除をすると気持ちいいのか」という問いを、子どもたちと一緒に考えてみませんか。子どもは、質問を出されると、答えを考えたくなくなるものです。そうすることで、教師からの押し付けではなく、自分たちで答えを見付け出すことができます。

二 ありがとうカード交換でやる気 UP

子ども同士による評価を取り入れてみましょう。

(例) ありがとうカードの交換

ありがとう

〇〇 さんへ



〇〇さんのお陰で、教室の床がピカピカになったよ。ありがとう。

□□ よい

ありがとう

〇〇 さんへ



いつもていねいに掃除をしてくれてありがとう。ほうきの使い方が上手なので、下級生のお手本になっていてすごいな。

△△ よい

三 掃除のチームワークを楽しむ

「〇分でピカピカにして掃除を終えるには、10人のチームワークが必要だよ！」などと鼓舞し、チームで乗り越える楽しいゲーム感覚で掃除に取り組むようにすると、掃除が楽しい時間となるかもしれません。また「協力する」ということが分かりにくい子どももいるかもしれません。「この机を五つ拭いてください」など具体的に役割を振ってみましょう。感覚過敏も考えられるようであれば、比較的取り組みやすそうな「役割」を提案して本人に選ばせることも有効です。



先生の困りごと

すぐに他の教室に入っていき子どもがいます。「学校のきまり」だから入らないように注意するのですが、効き目がありません。やめさせるには、どうしたらいいでしょう。

- ① 「何で入ったらいいか?」と問う子どもに対して、「『学校のきまり』です」など、決まり文句だけで返す。
- ② その子どもに他教室に入りたがる理由を聞いていない。


 なんでこうなるの?

自分の学級に居心地の悪さを感じている
規範意識が低い、又はルールに納得できていない

他教室に自由に入出入りすることはなぜいけないのかということについて、子どもへの以下のような理由の説明が不十分だったり、教師自身も明確になっていなかったりということが考えられます。

「他教室に自由に入出入りしてはいけないというきまりは、防犯や防災上の問題を配慮してのこと」があります。また、「トラブルにつながる可能性を危惧している」などの理由もあるでしょう。自分の教室は、自分の居場所であり、自分が所属している場所です。

「勝手に入ってよい場所とそうでない場所を考えられる人に育てるため」という理由も大きいと思います。

あったか秘策

Change!

31

安心・安全な居場所づくり

一 自分の教室が“居場所”

ハード面では、教室環境の整備がポイントです。それぞれの教室を、ストレスを感じさせない、すっきりと整頓された空間にしていきたいでしょう。

ソフト面では、学級の中での良好な人間関係づくりが大切です。学級編成後は特に、自分の学級に慣れるように、構成的グループエンカウンター（p.131）など人間関係づくりプログラムを取り入れて、どの子どもにとっても、自分の学級への所属感が感じられるようにしていきたいものです。

二 子どもと対話し、折衷案を考える

上のような取組を続けても、どうしても他の学級の友達を訪ねていく子どももいるでしょう。まずは、その子どもの話をじっくり聞いてあげなくてはなりません。その上で話し合い、折衷案を一緒に考えてみましょう。あえて他の学級の子どもの交流スペースをつくり、誰でも使える場所を用意するのも一つの手です。そうすることで、学級の枠を越えた学習の場にも利用できるという副産物を生むこともあるかもしれません。

三 納得できるルールにする

「なぜ他教室に入ってはいけないの?」「『きまり』だから」では、子どもは納得できません。なぜ、このルールがあるのか、学級で話し合い、子ども一人一人が納得できるようにしましょう。各学級で話し合ったことを集会で発表し合うなどすると、学年や学校全体の共通ルールとなり、効果的です。

また、ルールの提示にもコツがあります。「他教室には入らない」のような否定文ではなく、「短い休み時間は、自分の教室で過ごす。長い休み時間は、外で元気よく遊ぼう」や、「他の学級に用事があるときには、先生の許可をもらおう」などの肯定文で示すと分かりやすいです。